



TITLE:

2000年度インゼミ報告 VS高崎経済 大学矢野ゼミ・ディベート

AUTHOR(S):

藤中, 康生

CITATION:

藤中, 康生. 2000年度インゼミ報告 VS高崎経済大学矢野ゼミ・ディベート. 岩本ゼミナール機関誌 2001, 5: 90-94

ISSUE DATE:

2001-03-26

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56888>

RIGHT:

2000 年度インゼミ報告 V S 高崎経済大学矢野ゼミナール

文責 藤中康生

11月18日(土)に芝蘭会館において、私たち京大岩本ゼミと高崎経済大学(以下高経)矢野ゼミとの間でディベートが行われました。以下、本番までの準備と当日の様子を、主に時間の流れに沿って記していきたいと思います。

【1】夏休み前まで

5月の下旬に、「インゼミでやってみたいテーマは何か?」と話し合ったのが、今年のインゼミに関するファーストアクションだったように思います。さすがにまだその頃は、2回生は当然としてインゼミで中心になるべき3回生もあまり実感が湧かなく、積極的にこれがしたい、というような意見が出ず困った記憶があります。それでも、候補として上がった①円の国際化、②アメリカのニューエコノミー、③リージョナリズムとグローバリズム、④環境問題、から多数決で選ぼうとしたのですが、どれも満遍なく票が入ったことから察せられる通り、「これだ!」という岩本ゼミの方向を見出すことが出来ませんでした。そこで、方針として、この4つのテーマを相手校(今年も4校!!)に提示し、相談しながら、また他のインゼミとの兼ね合いも考えながら決めていこう、ということになりました。

高経が通常ゼミで「アジア経済」を扱っているということ、ここ数年岩本ゼミではインゼミでアジアを扱っているので関連資料や事情に精通している先輩方も多い、ということから、(上記の③から派生した形の)「アジアにおける地域主義」で考えてみよう、ということにひとまず落ち着きました。これが決定したのが、蒸し暑さがピークに達した6月半ばのことでした。また、この時期に、対高経・神大(後に同志社・明治も加わる)の「アジア」班と、対関学・阪大の「アメリカ」班と大きく2つに分かれて勉強を進めていこう、ということも決めました。

このように一応テーマらしきことは決定したものの、ここからは遅々として進みませんでした。「日本は地域統合に参加すべきか否か、っていうテーマはどう?」とか、「外国為替審議会報告は必読。チェンマイ・イニシアチブについて調べてみてはどうか。」などのアドバイスを先生や柴田さんから頂き、また関連がありそうな(と僕には思われた)文献を自分でも探していたのですが、この段階において僕にとってはなんか雲を掴む様な話で、とりあえずは言われたものや、「アジア」と名のつく物を数冊読んでみたものの、「これをどうディベートにせいっちゅーねん!」というような感じでした。

この時期、「早くテーマ詰めな、本読まな。」と焦っていたのは僕だけで、高経班長(後に諸種の事情により僕に代わることになりますが)を始め、他の班員はゆったりと構えていたように思います。結果から言いますと、まだこの時期には相手も準備がそれ程整って

いないですし、テーマは直前まで流動的ですし、僕のような「焦り」は不必要でした。しかし、10月の時点で「え、ディベートって僕達も参加するんですか？」と発言する2回生がいないように、この時期から少しずつゼミ全体で、インゼミに向けての具体的な取り組みをしていく必要性を感じました。インゼミ直前期に行った「模擬ディベート」を、この夏休み前の時期に行ってもおもしろいんじゃないか、と思います。

とにかく夏休み前のインゼミの取り組み方は改善の余地があると思いますので、これを読む後輩の皆さん、頑張って改善して行って下さい。

【2】夏合宿～直前期

夏休み中は、特に集まらず、夏合宿で使用するテキスト、「アジア安定通貨圏（村瀬哲司著）」と「入門・国際経済学（清野一治他著）」の各々の担当個所の作成にあてました。伊勢で行った夏合宿では、アジア班の発表は時間の関係で前者の「アジア安定通貨圏」の報告を中心に行い、ユーロ（対神戸・同志社インゼミ用）、アジア通貨危機、危機後の復興、アジア安定通貨圏についての理解を深めました。ここで具体的なテーマとして大きく分けて2つ候補にあがりました。一つは、「アジアの金融システム安定、特に最後の貸し手を担う機構として、IMFと地域版IMF（AMF構想、新宮澤構想、チェンマイ・イニシアチブで取り決められた地域間スワップ協定など）、どちらがより望ましいか。」ということ。もう一つは、「アジアのエマージング諸国にとって望ましい為替制度は何か？完全変動か、管理フロートか、カレンシーボードか、バスケットペッグか、はたまた共通通貨か。」でした。

高経でもほぼ同時期に夏合宿を行い、そこで挙げられたテーマとこちらの上記したテーマを9月の中頃に交換しました。高経で挙げたテーマは、「新宮澤構想についての評価」と、「為替の安定について」ということでしたので、お互いで候補に挙げられている「アジア（この段階では制度論的なものなのか国・地域を限定したものなのかは未決定）の為替制度」について、その中でも近年盛んに言われている「バスケットペッグ制」を軸にしてテーマを詰めていこう、ということになりました。

「バスケットペッグというのは色々な所で言われているから、きっとインゼミのネタになるのがたくさんあるんだろう」ぐらいの気持ちで、あまり深く調べずに決めたこの「バスケットペッグ」なるものに、最後の最後まで振り回されることになろうとは、この時は思いもしなかったのですが・・・それはまた後述することになります。

9月のテストが終わってから、10月の間は週に2～3回のペースで勉強会を行いました。アジア班には、去年からの継続者が3人しかいなく（後は2回生と3回生からの編入者）、為替の理論やアジア通貨危機などを勉強するのが初めて、という人が多かったので、基本的な知識を身に付けるまでは皆で一緒に同じことを勉強して、ある程度のストックができれば徐々に各々の裁量に任せる部分を増やしていく、という方式で行いました。使用する

本や論文も、指定したものを使ってもらいました。この方式だと、調べる内容や分野を各々に割り振った後は使用する参考文献も含めて担当部分は各々の裁量に完全に任せる、という方式に比べて班員全員の合計としての知識の蓄積のペースが遅い、という欠点も確かにあったと思いますが、班員の間で情報の非対称性というものが生じにくく、立論を作成していく上での議論に皆が参加できる素地が形成できたのではないかな、と思います。今回の様な勉強会の方式が結果的に良かったのか否かについて客観的な評価は判断しかねますが、勉強会が班員全員にとって有意義なものにできるかどうかは班長の腕の見せ所の一つかと思いますので、この報告書を読まれる班長さんは、その状況状況に応じた方法を模索して欲しいと思います。

高経との交渉はどうだったか、と言いますと、10月中頃には、「アジアで通貨バスケット制を採用することは、当該地域の経済成長にとって望ましいか、否か」という仮テーマが決定し、その後の交渉で対象国はタイにすること、為替制度以外の条件は所与とすること、持続的な経済成長が目的であること、固定対変動の相違を明確にする為にインフレ調整をしないバスケット制であること、京大が肯定側で高経が否定側をとること、等々が11月第1週ぐらいまでに決定しました。

【3】直前期（本番約10日前～前日）

仮立論を交換し、テーマの諸条件についても詳細を決め、あとは内容のより深い理解と質疑応答などの本番用の練習だけだな（「だけ」と言ってもやらなければならないことは大量にあったのですが）、と思っていたところ、大変なことが発覚しました。「バスケットベッグ制」というのがよく分からん！

バスケットベッグ制を採用することの目的は、言うまでもなく「為替の安定」です。バスケットの構成通貨をドル・円・ユーロの主要3通貨（周辺国通貨も構成通貨とすべきだとの文献もありましたが）とし、それらを貿易額シェアに応じてウェイト付けする。そうすることで、「為替の安定」が達成され、それによって貿易や投資に好影響がある。というようなことはバスケットベッグを記した文献にはどれにも記述がありましたし、具体的な数値を用いてその有用性や、維持不可能性について述べたものも多数ありました。僕達も、バスケットベッグ制がもたらす影響については整理をして理解していたのですが、この直前になって、バスケットを安定させる様に介入することで、どのようなプロセスを経て書かれてあるような「影響」が出てくるのか、というのが分からない、どこにも書いていない（と僕達には思われた）、ということが判明しました。作ったバスケットの変化率をゼロにするように中央銀行が介入することで、実効為替レートを安定させることができるのは分かったのですが、貿易の決済通貨や資本取引に圧倒的にドルが使われている現状に対し、対米・日・欧州の貿易額シェアに応じてウェイト付けしたバスケットを安定させることで一体どれほどの影響があるのか、幾多の本や論文に書かれているような作用がどうしてお

こるのか、ということがどうしても論理的に示すことができませんでした。ディベートが終わった今でもよく分かりません。

このようなディベートの核になるところが分かっていない、というのが直前になって初めて発覚したのは、バスケットベッグによる「結果」だけを鵜呑みにして、本質を理解する作業を怠った、テーマを決定する際のサーベイが不十分だった僕の責任であったことは言うまでもありません。あやふやな説明しかできず高経の方には多大な迷惑をかけたと思いますし、この点は激しく反省しなければなりません。このようなドタバタ劇を身近で見ていた2回生諸君には、この経験を是非活かして、テーマ設定に際しては十分な注意をして欲しいと思います。

【4】ディベート当日

「タイが今すぐ通貨バスケット制を導入することは、タイの持続的な経済発展にとって望ましいか、否か。」というテーマに対し、両校の主張の骨子、質疑応答の内容は以下の通りでした。

○ 京大（肯定側）の主張

- ①通貨バスケットの変化率をゼロにするように介入し続けることで名目実効為替レートが安定する。そうすることで為替のボラティリティ（主要通貨間も含む）が解消され、貿易が盛んになる。また貿易が安定して伸びるという見通しが海外投資家の投資インセンティブを高め、直接投資や長期投資を呼び込むことができる。
- ②バスケットの価値は一定であるが個別レート（バーツドルレートなど）は変動するために、危機をおこす程の過剰な資本流入は防げる。
- ③金融政策の裁量度は失われるが、インフレバイアス的な政策をとる余地がなくなるということは、かえって経済発展にとって望ましいことである。

○ 高経（否定側。すなわち現状の管理フロート制の支持）の主張

- ①金融政策が自由に行えるため、低金利の長期融資を活用することで産業構造改善事業を行うことができる。
- ②伸縮的な為替制度自体が、外的ショックを自動的に相殺する機能を持つ。
- ③投資家に為替リスクを認識させ、大規模な投機を回避することができる。

○ 質疑応答

京大側は、産業構造改善事業や銀行の不良債権処理の為に低金利政策を行うことによってインフレが生じること、インフレが生じれば高金利政策を用いてそれを沈静化する、という回答を高経から導きだし、金融政策が自由に行えることで全てが解決できるという高経の主張の矛盾を示しました。また、高経の主張の②③が、個別レートはある程度変動するバスケットベッグ制でも見られることで、管理フロートが望ましいとする根拠

としては弱い、ということも主張しました。

高経側は、アジア通貨危機に依拠して、投機に対するバスケットペッグ制のもろさ、希薄な為替リスクの認識による過剰な短資流入の可能性を主張してきました。また、低金利政策を採用していることで産業構造改善事業が進展していること、管理フロート制に移行してから民間の対外債務残高が減少してきていることを、資料を用いて主張してきました。

○ 議論を振り返って

結果は3-0で京大の勝ちとなりましたが、京大側が勝利に値する程良かったのか、と問われれば、もちろんNOでしょう。両校とも問題点、改善すべき点がいくつかあったのではないかと思います。京大に関して言えば、資料を用いた高経からの質問（対外債務残高に関して）に有効な回答を示せなかったこと、高経からの質問に対して自分達が答えた回答を最終弁論に全く活かせなかったこと、自分達の資料を有効に使えなかったこと、立論の読み方や質問の仕方のバランスなどのディベートの技術的側面の未熟さ、などが問題点としてあげられると思います。高経に関して言えば、京大の一番の弱点であった「名目実効の安定→輸出競争力の安定」を厳しく追及できなかったこと、京大から金融政策が自由に行えることによるデメリットを指摘された際に有効な回答が示せなかったこと、高経の主張の②③を経済成長にうまく結び付けられなかったこと、などがあげられると思います。

あと、「投機」に関して一番意見が対立したのですが、投機は固定（バスケットペッグ制）で起こりやすいのか変動（管理フロート）で起こりやすいのか、両校とも自分達の主張を相手に納得させることができなかった、というのも、両校の勉強不足を端的に表していると思います。講評をして頂いた高橋さんには、「そんなもんどっちでも起こるに決まってるやろ。」と一蹴されてしまいました・・・。

とまあ欠点ばかりを書いてきましたが、良かった点ももちろんあると思います。京大は質疑応答で得た回答を最終弁論にうまく活かせたと思いますし、高経は自分のところの資料のみならず京大の資料をも自分達に有利に用いたのが良かったと思います。

【5】終わりに

インゼミを、勉強したことの成果を示す場として捉えるなら、僕らは量的にも質的にも成功したとは言えないかもしれません。しかし、当日の講評で柴田さんがおっしゃっていたように、インゼミは「結果が大事なのではなく、その過程が最も重要」であるならば、今回のインゼミは成功と言うことができるだろうと僕は思うのです。これも、頼りない僕を最後まで支えてきてくれた、班員、先輩、そして高経の皆さんのおかげであることは言うまでもありません。この場を借りてお礼申し上げます。

来年も後輩がこの素晴らしいインゼミを頑張ってくれることを願います。